
刃物と銃と弦楽器

卯玉栗音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刃物と銃と弦楽器

【Nコード】

N0766Z

【作者名】

卯玉栗音

【あらすじ】

「私が出会ったのは不思議な人」

1, 出会いと弦楽器(前書き)

※小説初心者が書いてます。きっと途中でごたごたしてくると思いますが、どうぞお時間ある方はゆったり見ていってください。

1, 出会いと弦楽器

5月 天気が良い。

「ぐふううふうう…」

頭が痛い。どうしよう、今日は新入生の部活体験があるから、しっかり宣伝しないといけないのに。

「大丈夫？」 「保健室行った方が良くない？」

隣にいる数人の友達が心配そうに私に声をかける。

「大丈夫。 少しすればある程度直ると思うから。」

今日だけは休むわけにはいかない。

私の名前は木野一紀。友達からは微妙に混ぜ合わせて「キイノ」と呼ばれていた

この春【上下高校新二学年】になった 「カミシモ」とはややこしい名前だ。

部活は吹奏楽部 コントラバス担当。

休むわけにはいかない理由はこのコントラバスにある。

コントラバスはバスパートである。

そしてバスパートはクラリネットやフルートなどより人気がない。

そして入れる人数も少ない。

その分、宣伝には力を入れないといけないのだ。

運動部の友達と別れ、他の文化系の部活の人と別れていくうちに数名の友達と一緒に音楽室に入った。

少し遅れてしまったらしく、音楽室の周りには結構な人数の1年生

がいた。

急いで楽器庫から楽器を出してくる。頭痛のせいでいつもより重く感じる。

いつもの席に着こうとした瞬間

「ひゃあああ!!」

上履きに学校特有のビニール製床がひっかかりこける。

素早く片足を前に出し、体は止まる。

が、手の力は抜け、楽器が倒れる

目をぎゅっとつぶった。

(やばいっ!! 楽器が!!!!)

頭がフル回転して楽器が音をたてて床にぶつかる瞬間を映し出したけれどそう思ったときにはもう楽器は倒れることなく止まっていた。

「ん…?」

「大丈夫…です…か?」

目を開けるとそこには見慣れない外観をした立っているようなしやがんでいるような微妙な瞬間な体勢の少女がいた。

合った目は少し赤に近いピンク色のような目をしていた。

身長はこのポーズではわかりづらいが、きっと普通くらい

一番特徴的なのが髪の毛。腰の少し上あたりまで伸びている髪はなんと金色をしていて毛先の方が目と同じピンク色になっていた。おまけに、頭のとっぺんから二本の長い髪の毛の束がはねていた。

一瞬にして「リュウグウノツカイ」を思い出した。

彼女は手で支えていた楽器を元の角度に戻し、自己紹介した。

「初めまして 一年のカノン・エレクトリアです。」

なるほど、外国人か。

改めて見ると身長は私より少し大きいようだった。

私自体が少し小さい体格なのでたぶん一年としては標準身長だろう。

「えっと、大丈夫でしたか？」

大丈夫だよ。ごめんね。と謝罪した後、楽器を体験させてあげた。

彼女は昔弦楽器をやっていたことがあるらしく基本くらいは知っているらしい。

「お嬢様だな…あれは」

そんな子が後輩になればいいなあなんて思いながら帰る。

いつの間にか頭は痛くなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0766z/>

刃物と銃と弦楽器

2011年12月2日22時47分発行